

---

# 神様おまもり隊！

戯言

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神様おまもり隊！

### 【Zコード】

Z0589E

### 【作者名】

戯言

### 【あらすじ】

「おぬしは他人とは違った能力を宿しているのじゃ」突然神様から言い渡された命令、それは神様を守ることだった！さて、青年は見事刺客から神様を守り通すことができるのか！？弱きを助け、強きを挫く？神様おまもり隊、ただいま見参！

行謹その一・選ばれしものー? (前書き)

もつ一つの連載物終わらなこつひ違つ連載物書いちやいました。  
同時進行できるかな?

守護その一・選ばれしものー・?

夏。

ドでかいビルが立ち並ぶ街中。

太陽にじりじりと焼かれたアスファルトに立つ、陽炎。

そんな灼熱地獄の町を、一人の青年が歩いていく。

「あ、あちい・・・。」

その青年以外は誰も歩いていない、狭い路地裏。

青年は額の汗も拭わずに、一心に自転車を押して歩いている。

「う~ん、ヒートアイランドオオオウーー！」

青年は叫んだー！」の想いよ空に届けとばかりに！

「くつーよけいに熱くなつちました・・・。どーしてくれんだよー、  
神様～」

「か、神様を悪く言つなー！」

「ん？」

いつの間にか、男の後ろに一人の少女が立っていた。  
しかも、教会にいるシスターのような服を着て。

「・・・。」

「神様は忙しいんです！あなたのような自分の事しか考えてないような自己中人間の願いなんか、叶える時間は無いんです！」

青年は反論した。

「はあ！？今いきなり会つた奴にそんな事言われたくねえよ！お前に俺の何が分かるつづうんだよ！」

「初対面でも分かります！だって顔に書いてありますもん。僕は悪人です、って」

「俺は言つほど悪人じゃねえよ！大体顔になんか書いてあるか！」

「やつ書つと思つたので、やつを書いておきました」

「なにい！？いつの間に！」

「まつたく、気付かなかつたのですか？あなた、隙だらけでしたよ？」

「お前は初対面の奴の顔に落書きするような奴なんだな！？そんなんだな！？」

「アアアアアアアア…。

その時、雲が割れ、中から元気な赤ちゃんが…じゃなくて…。

その時、雲が割れ、その間から声がした。

「君たち、喧嘩は止めるんだ…。」

「いーいーの声は…。」

「な、なんだなんだ！？」

「か、神様・・・！」

「な、なにい！？」

空からいかにも神様っぽい人が降りてきた。  
後ろから後光が射している。

「神様！ 訊いてください！ この自己中男が神様の事をバカにしてた  
んですよ～？」

「バ、バカにはしてねえよ！」

「な、なにい！？ バカにしていただと～！」

「人の話聞かねえ神様だなおい！」

「そんな君には罰を与えねばならんな・・・。」

「だから話しが聞けつて！」

「よし、では君にあれをさせよつかの」

「ちくしょう、なんなんだよ・・・。」

「それはだな・・・、」

・

## 神様の話はこうだった

この世界には神に逆らひ輩かし

その者とおは 神を祀そよとたぐさんのお刺客を送つてくるらしい  
だから、その者たちを迎へ擊つ機關が作られたらし。

略して

「名前の付け方が安易でしかもかつこわりー！」

「つべこべ言わないの！」

「うおっほん！話を続けねー？それでな・・・、」

そして、立てる少女もその一顎りしこ。

「へえ、こいつが？」

「そうです！人は見かけに寄らないんですよ？私みたいにかわゆい女の子でも、」

「実はムキムキの女版キ  
肉マンって事だな?」

「ちつがーう！」

「じゃ、何？」

「わたしはちよつとした特殊能力つてやつが使えるんです」

「筋肉がムキムキに！」

「なりません！」

少女が悲痛な叫びを上げる。

「じゃあ、何？」

「はあ・・・、何でそんなに筋肉ネタが好きなんですか？女の子がムキムキつていうのは、あなたにとつてそんなに萌える要素なんですか！？」

「いや、全然？むしろ嫌だ」

「じゃあもういい加減筋肉ネタはやめてくださいー。」

「ちつ、ちつがねえ・・・。」

「ちつがなくないです！」

「これこれ、五月蠅いぞい。話しひを聞け」

「これ以上聞かなくても何となく先が読めてくるぢや」

「せつ? では言つてみ?」

「よつするに、俺にその格好悪い名前の機関に入つて、神様を守つて事だろ?」

「格好悪いって言つたな!」

「ま、やつこ? 事だな」

青年はしかし、と首をかしげる。

「やつは言つけどな? 俺は特別、力が強いワケでも無いし、この女みたいに筋肉がムキムキになるわけでもないんだぜ?」

「わたしは筋肉ムキムキになりません! 何度言つたらわかるんですか!」

少女が再び叫ぶ。

「まあまあ、落ち着くのじや。 も、あまつこの子をいじめるのない。」

「でも、ここつをいじつてるとなんとなく面白こ」

「人で遊ばないで下せ!」

「これ、ひるせいだ。 それでな青年、きみはまだ気付いてない、といつか目覚めてないのだが・・・、きみも他人とは違う、特殊な力が宿つてこるのじやよ」

「ほ、ほう？」

青年は少し驚いた顔をする。

「実はわたし達『M・K・M・K』は神様をお守りする以外に、素質のありそうな人たちを勧誘して仲間を増やしたりもしてるんです。それで、他の人たちより一際大きい力を発していただあなたに前々から田を付けていたんです」

「なるほどな、つー」とはお前は俺をずっと尾行していたんだな?」

「やつですー毎日毎日アンパン片手に・・・。」

「間抜けだな」

「うぬせこですつー」

「声を掛けてくれたら、茶くらに出したのに」

「ほ、本当ですか?」

「嘘だ」

「ひどい〜〜〜・・・。」

「で、神様よー。俺の特殊能力つて、一体なんだ?」

「それはまだ分からん」

「は、はあー?」

青年はがっかりした表情を浮かべる。

「一度、機関の本部で訓練して無理矢理能力を田覚めをせん見るしかあるまー」

「そりが、訓練しないとだめなのか・・・。」

「そりがっかりするでない。おぬしは見込みがあるから、のうつりが田覚めるのにそり時間はかかるまー」

「や、そりなのか・・・。」

「とこり」と、ぬぬじはわしうに着いて来てもううれしい良くな?

「ま、仕方ないだろ? 神様の命令だし」

「ま、そりじやな」

「そりと決まれば、早速本部に行きますよ?」

「つむ、あとの事はようじく頼んだぞ?」

「はー、おまかせトモー!」

「では、わしせんそろ行くかの。神階は神階で色々なことのじや

そう言つて、神様はまた空に昇つていった。

「さて、それでは行きましょうか

「おひ

「おひとやの前に、あなたの名前をお聞かせ願えますか?」

青年は呑呑つた。

「俺の名前は『みかがみ觀鏡要かなめだ』

ここから、青年『觀鏡 要』のお仕事が始まる。

守護その一・選ばれしものー? (後書き)

乱筆乱文誠に失礼。

いや、なんかよく分からない小説に仕上がるがっちゃいそうですね・・・。

もう一個の小説も更新しなきゃいけないのに、同時進行なんて僕に  
できるのでしょうか・・・?

とりあえず、温かい目で見守つてしまつてください。

感想、よろしくお願ひ申します!

夜遅くまで頑張りましたよ。

「ひいー…むづ無理ー」「メンなさーーー！」

「ここは『M・K・M・K』地下訓練場。

青年、観鏡 要が床にへばりついている。

その前に、巨大なトゲトゲバット片手に立王立ちになつている少女。

「ほり、早くたつて下さー！訓練はまだ始まつたばかりですよー。」

「始まつたばかりつたつて、いつや厳しそうだら、いくらいなんでも！」

「全然？むしろ軽いほうです」

「いや、お前らにひとつては軽いかもしれんが、俺はつこいつきまで一般市民やつてた奴だぞー？そんな奴にこんな仕打ちはあまりにも・・・！」

「つべりべ言わずに立つて下さーーーほり、行きまわーーー」

そつと少女性は巨大なトゲトゲバットを構える。すると、要是泣きそうな顔になる。

「ハ、ゴメンなさいゴメンなさいゴメンなさいゴメンなさいいいいい

／＼・・・。」

「はあ、情けないですなえ・・・。」

「大体、トゲトゲバットを持つて襲つてくるお前から逃げ続けるだけで、俺の能力がホントに田覓めんのか？」

「知りません」

「無責任だなオイ！お前は俺を田覓めさせたいのか永眠させたいのかどっちなんだ！？」

「「」の訓練で田覓めた人だつているんです、我慢してくださー」

「やだ、俺死んじまつー。」

「大丈夫です、殴るときはみねつけじときますから」

「それ、みねド「だよー？」じこもかしこもトゲトゲだらけじやねえか！」

「いえ、これ、トゲトゲはずれるんですよ？便利ですよね」

そう言つて少女は、持つているトゲトゲバットのトゲトゲの一部分をはがす。

「これで昔みたいに、間違つて撲殺してしまつ、なんて事が少なくなつて大助かりですよ？」

「ちよつと待ておい！いつたい昔なにがあつた――――」

「やだなあ、そんな事いちいち気にしてたら、・・・きりが無いで

すよ。・。・。？」

要は、出口に全力ダッシュする。  
マオのB・ダッシュも真っ青の走りっぷりだった。  
しかし。

「ひ、ひいつつ！」

少女は鬼神のごとき形相で要を追つてきた。

マ 才能を吹くであつた速である。

「ハ、ゴメンなさいゴメンなさいいいいい。。。

「てめー、この野郎……、何逃げようとしてんだ?ああ!?

「ひいつ！」

それはもう少女ではない。

形は少女だか、絶対に、人間の皮をかぶつた鬼だ。要は本気でそう思つた。

「てめエ、能力欲しくねえのか!? ああ!?」

「ほ、欲しいです！」

「じゃあ、しつかりしりやーーー。」

「は、はーーー。」

「よつしや、じゃあ始めつか

「わ、分かりましたー。」

「じゃ、追いかけますよ、いいですか?」

少女の口調が元に戻った。

「よーい、・・・スタートーー。」

要が走り出し、その後を少し遅れて少女が追いかける。

しかし、あつとこづ間に距離が縮まり・・・、

「はぐうおあー。」

鈍い音と共に、要が倒れる。

「あつたぐ、骨がないですね」

「お前が異常過ぎなんだ・・・。」

「やつなんですか?わたしはこれが普通だと思いますけどね

「それはお前の間違いだ。ほとんどの人間はそんな速さで走らない」

「いや、走り出さぬ?」

「お前、オリンピック出でるよ・・・。」

要が溜め息を吐く。

「こ'れ、出れませぬよ。世の中にはわたしより速い人なんて幾らでもいますよ」

「俺の知り合いにはいないけどな」

「ふつ、數さんに友達なんていふんですか?」

「こ'れよー、俺にだつてー友達ぐりーー。」

「いえ、きつとそれは要さんが思い込んでただけですよ。その人たちは要さんのことを友達だとは思っていませんよ、絶対

「だ、断言されたー!」

「ま、そんなことはないじめもこ'れです。要さんのことなごて考えるだけ時間の無駄です」

「俺の扱いがどうどうと酷くなつてこ'く・・・。」

観鏡 要の能力が目覚めるのは、きっともづくべ・・・のはず。

守護その2・地獄の訓練（後書き）

乱筆乱文誠に失礼。

この小説、なかなかきついものがありますね・・・。  
途中で投げ出す事はしたくないので、少しでも良い方向へ向か  
うよう、頑張ります。

感想、評価、ドシドシお願いします。

守護その3：能力開花（前書き）

楽しんでいただけたら幸いです。

### 守護その3・能力開花

「くわ、どうすりゃいいんだよ…。」

爆音。

要の隠れていた車が吹っ飛ぶ。

そして、車のあつた場所に穴とも言える大きな爪跡が残る。  
コンクリートがはじけ飛び、要の上に降り注ぐ。

「つ痛うつーあんなの喰らつたら…！」

死んでしまう…！

そう思い、要は必死で逃げ続ける。

「ちっ、ちくしょー！」

要は叫ぶ。

その声を目印にして、神様への刺客がこちらに向かつて巨大な爪を  
振り下ろしてくる。

間一髪でその攻撃を避ける要。

「くわ、こんな事になつたのも全部あいつのせいだー。」

「數せんばかりの素質がありませんねえ……。」

訓練後。

幾ら危険な田に遭わせても能力が開花しない要に向かつて、少女はそう言つた。

「んー、ここの程度の危険じや駄目なのかの?」

神様もそんな事を言つ。

「ちよ、ちよっと待てよー!」とは、もつと危険な事をせりふのか!?

怯えながら恐る恐るたずねる。

「残念ながらそつするしかなね!」ですね……。」

「致し方ないの?」

一人が溜め息を吐く。

「あ、あー……。」

「おぬしこは早く能力を田覚めさせてわしを守つてもういたいから  
の?」

「でも、どうすればいいんでしょうね…。」

「うーん、と一人は悩み始めな。

要が口を挟む。

「な、なあ、とんでもない事は考えんなよ?」

「そうだー。」

その時、少女の頭の上辺りに電球が光った、…気がした。

「神様、要さんを戦場に放り込んでみましょーよ」

「は、はあー…?どうしてだー…?」

要が仰天して少女に尋ねる。

少女は当然のようになに要に言い放つ。

「つまり、要さん、こつもわたし達がやっている任務を体験して  
もらおうと迷いつこんですよ」

「と、こつと?」

「神様を狙つ刺客と戦つてもらいます」

「わあああああああああああー…?」

要が四つんばいで後ずさつする。

「む、無理無理!能力なんも持つてないのじじやつて戦えとー…?」

「戦つてこの中で匪賊めをせしんだぞ」

「出来るわけねえーだろー…?」

「なら死ぬだけですね」

「冷たいなあ、せつ!」

「これ、うるわしい。とつあえず、次に出でた刺客と戦つてもうつかの」

「マ、マジかよ…。」

・・・・・・・・・・

と、言つ事なのである。

その話の後、現れた敵のところに半ば強制的に送りられて今に至る。

そして、その敵ところのが…、

「巨大熊かよー！」

全長五メートルもあるつかといつ程の大きさの体を揺りし、要に近づいてくる。熊はその巨体に似合わず、俊敏な動きで襲い掛かつてくる。

「おひおひー、逃げてばっかりじゃ勝てないぞーー！」

「うひ、クマじゃべんのかよー！」

「なんだあー？しゃべっちゃわりいのかあー？」

「ちひ、この不思議生物が……。」

怒涛の攻撃を避けながら要は咳く。

「うーん、どうしたもんかな……。」

「おらおらあー考へ事している暇があるのかあー！？」

「……くつー。」

駄目だ、避けられない……！  
要がそう確信したとき。

「……だから素質がないっていっただんですよ

少女の小さな背中。

しかし、今の要には誰よりも大きく、頼りがいのある背中。  
少女が要に背を向けて、その手に持つムチで巨大な爪を受け止めて

いた。

「やつぱり、やめとけば良かつたですかね…。」

「お、お前…？」

「要わんの」と見捨てたりはしませんよ。とりあえずちやつちやと終わらせちやうので待つてください」

「ぐ、ぐう…」

巨大熊がひるんだ隙に、少女が的確に相手にしなるムチを打ち込んでいく。

その一発一発に、どのくらいの威力が込められているのかはわからない。

が、しかし、その攻撃の一回一回に熊がのけぞるとか見ると、相当の威力があることが見て取れる。

「す、すげえな…。」

「ぐうつ、じうなつたら弱そうな奴だけでも…。」

巨大熊が要一人に狙いを絞る。

「な、なにつ…？」

「要わん…！」

飛び掛ってきた巨大熊から、要をかばい爪の一撃をくらつて吹つ飛ばされる少女。

「だ、大丈夫か！？」

少女は気を失っていた。  
額からは血が一筋。

「ち、畜生、俺のせいだ……！」

「ぐふふふ……後はお前だけだあ、……死ねえつ！」

要の体の上に爪が振り下ろされる。  
そのとき。

光。

「調子にのつてんじや、ねえよつ……！」

要は手に持つた赤黒い大剣で爪を受け切り、熊をはじき飛ばした。

「な、なんで……！？」

熊に近づいてゆく要。

その格好は、神に仕える者としては、ふさわしくない風貌だった。  
手に持つ大剣は、どこまでも赤く、深い。  
まるで。

この世の全ての血を吸つたかのような。

深紅。

そして。

目。

要の目は、白目の部分が真っ赤に染まっていた。  
まるで。

この世の全ての罪を見定め、そして裁いたかのような。紅蓮。

髪が腰の位置辺りまで伸び、漆黒の黒髪にとけこむ赤い線が混じっていた。

それは、神に仕える者の風貌ではなかった。  
それは、そう。  
まるで。

死神のよつな。

「よくも！」こつに血を流せやがつたな……、歯あ食いしづれ……」

「ひ、ひ……」

「手前Hの魂、狩つてやる……。」

一刀両断。

熊は真っ一つになり、塵と消え去った。

ともかく。

要は見事、能力を開花させた。

だが、その自分の能力で大変な事件が起じるつとは。  
それこそ、神も予想していなかつたことだらう。



### 守護その3：能力開花（後書き）

乱筆乱文誠に失礼。

どもども、戯言です。

この小説、書き始めたときはグダグダで終わりそう、とか思つていましたが、何となく、書いてるこっちが楽しくなつてきましたね…。何はともあれ、楽しんでいただけたならば幸いです。  
感想、お願いします。

## 守護その4・医務室の雑談（前書き）

更新遅いですね、僕…。

「え！？ 能力が目覚めたんですか！？」

「ま、まあな！」

地下訓練所。

要と少女はそこにいた。

要は、刺客を倒した後、気を失ったままの少女を背負つて本部まで帰つた。

そして、少女を医務室に預け、一旦自宅に戻つた。  
この組織に所属しても、このことを他人にバラさなければ基本的に自由にしてもいいらしい。

つまり、本部に泊まり込んでもよし、いつもの通り自宅で生活し、任務のときだけ本部に行くのもよし、身の振りは自由である。

しかし、泊まり込む人などほとんどいない。

組織の大抵の人間は、この組織を知る前は普通に社会生活を送っていた者たちばかりである。

そのため、今までの人間関係を崩したり、仕事や学校などを辞めてまで熱心に神様の守護をしようという人は、あまり居ないのである。

ま、そういうことで家に戻つた要なわけだが、特別今の仕事や人間関係が良かつた訳では無かつた為、荷物をまとめて、マンションを解約して、本部に居座ることにしたのである。

そして、本部に戻ってきて、訓練でもするかとこうとしゃり、少女が起きてきて訓練所の前でぱつたり、ところのが今の情景である。

「で、どんな能力だつたんですか？」

「教えねー」

「ひ、酷い！せつかく助けてあげたのにいーじんなことなら見捨てて殺されればよかつたのにいー！」

「不吉なことを言つんじゃねえよー！」

「じゃあ教えてくださいよ、能力ー！」

「それは無理だな。自分でもよく覚えてないから」

「はあーー？」

田ん庄をひん剥いて驚愕する少女。

「じゃあ、どうやって能力を発動したかも覚えてないんですねか？」

「まつたく覚えてねえ」

「じゃあ、やつぱり戦闘は出来ないんじゃ無いですかー！」

「いや、感覚だけは覚えてる…、『気がする』

「気がするだけじゃダメなんですよーひやんとできなやー」

「だいじょぶだいじょぶ、そん時は身体が勝手に動き出すで」

「んなわけないだろ「うがー」

「はい、ここから箇条書き。

1、少女の右ストレートが要のこめかみにジャストミートーーー！

2、振り抜かれる少女の拳。

3、空を舞い踊る要。

4、誇らしげに拳を振る少女。

5、まるで一陣の風に吹かれた枯葉のようこひらひらと舞い落ちる要。

6、訓練所前の廊下に響く、何かが潰れたような着地音。

箇条書き終了。

後には、無残にも潰れたカエルのような屍が残ったのだった…。

「…。」

要が次に田を覚ましたのは本部の医務室だった。

「つーちくしょー、本気で殴りやがって…、まだ頭がじんじんす

「おへやつとお田寝めかい？」

セイドやつと要はベッドの横の人影に気がつく。

「ん？ 誰だ？」

「誰だとばじ挨拶じゃないかね？ うん、今まで看病してやつていたのはこの私だと画つのに…。」

ヒーヒヒと笑つて、医務室担当のエルフ、ミコアンが要に話しかける。

「あ、ヒヒ医務室なんだっけ」

「セウ…ヒヒで、何であんなことになつてたんだい？」

「あんなことひて？」

「お前さんが、氣を失つたあの子を背負つて医務室に来たと思つたら、次は逆の立場であの子がお前さんを背負つて来たんだぞ？ なかなか楽しそうな情景ではないか？」

「別に楽しそうではないだろ？ がよ…。ただ、あいつにぶん殴られただけや」

「ぶん殴られたならぶん殴られたなりの理由があるんだろ？ それを聞かせておくれよ」

「別に教える義理は無いし、聞いても別に面白くないだ？」

「いや、面白くなくてかまわないや。どうせ私の體つぶしだ」

「ならなおさら教えねー」

「なに? こんなに頼んでるのに教えてくれないのか? 夜と黒く夜と無く付き切りで看病してやつて、添い寝までしてやつたところの」

「そ、添い寝だと? ？」

「ちゃんと眞を撮つてあるぞ? 」 ひへ、君が私に抱きつくなつてこる姿がな

「なあ、もしかして俺は今、脅迫されてこるのか? 」

「いや別に、そういう事ではないぞ。ただ教えてくれなかつたら、私とお前さんはそういう仲だつたと、本部のみんなが知るだけで」

「やうこうのを脅迫つて言つんだらうがよ! 」

「いいじゃないか、うん? 自分で言つのもなんだが、私は結構な美人さんだぞ? そんな私とこうこう仲だつたと本部のみんなが知れば、お前さんのことをみんながつらやましがるぞ? 」

「つらやましがられて、俺は確実にあなたのファンクラブの奴らに殺されるだらうな」

「ま、死にたくなかつたらむつせといわんかね

「さつあまで脅迫が暗示的だったのに、いきなり直接的な攻撃になつた！？」

そして、要は結局本当のことを話した。

・・・・・

「なんだ、そんなことなのか」

「コトヤンはそもそもがつかりしたように呟いた。

「だから言つただろうが、聞いても面白くないだつてな」

「いや、それでも少しあは期待していたんだ。なのに本当の面白くないだなんて……。」

「それはじょうがないだろ？」

「いや、じょうがなぐない。お前をんは私を楽しませるために、もつと盛り上がった話し方をしたり、あちこちを面白おかしく脚色し

なければならぬ義務があるんだ！」

いきなり激昂するリアン。

「なのに、なんの工夫もせずに話すなんて…、これは駄目だ！万死に値する…覚悟じひ貴様…この私が撮った写真をばら撒いてくれる！」

いきなり立ち上がり引き出しからぐるの写真を取り出す。

「ふふふ、これだこれだ！見ていろ貴様…お前さんが氣を失つていたから悪いんだぞ？私はお前さんが寝ている間にお前さんの体にあんなことやこんなことをしていたんだ！もちろんその写真も撮つてある…、これをばら撒かれたらお前さんはこの先ここでは生きてゆけなくなるぞ？それでも良いのか？嫌ならばもつと面白おかしく脚色して話しなおせーそつすれば今回まは見逃してやるぞ…。」

「あんた、ちよつとした話でもむきになりすぎだ…。」

ちよつ、わかつたよ…。

そつこつと頻はせつときした話を面白おかしく脚色して話して聞かせた。

「ははーふははーはははははーそつかーそんなことがあったのかーふははははー」

ミリアンは話を聞いている間、終始笑いつぱなしだった。

「そ、そんなに面白かったのか?」

「いや、別に話自体はそれほどでもなかつたのだがな? こいつ、話が浮かばなくておひねりしてお前さんを見ているとな?」

そうじつ ミリアンはまた笑い転げる。

「失礼な奴め…。」

そのとき、医務室に警報が鳴り響いた。

「な、なんだ!?」

「つむ、どうやら刺客が現れたみたいだな」

「ま、マジか!?. だつたら早く行かないと!」

「別に私たちが行かなかつたところで他の奴がいくんだが…。ま、

いいか、よし、要君、今回の刺客は私と一緒に共同前線とこひるでどうだ？」

ミコトランが手を差し出してくれる。

「なんだ、あんたも戦えるのか？」

「もちろんだ、結構強いぞ？」

「……こじだらば、じゃあわたくしヒゲゼー。」

黙せ!! リアンの手を取った。

## 守護その4・医務室の雑談（後書き）

乱筆乱文誠に失礼。

ほんとに更新遅いですね、僕。お待たせして申し訳ありません。

これに懲りず更新を待つていただけると幸いです。では、感想よろしくお願いします。

## 守護その5・共同前線（前書き）

更新の遅さは天下一品な僕。

## 守護その5・共同前線

「無理…やつぱ無理だつてこんなのお…」

観鏡要は追いかけられていた。

巨大な蜂に。

その蜂といつたら、全長6㌢はあるつかと言ひ程の巨体で、恐ろしい位の速度で要に迫つてくる。

お、音速超えてるんじゃね…？

要はそう思った。

が、そんなことはなかつた。

恐怖のあまり感覚がおかしくなつてゐるだけである。やられる側といつのは得てして皆そういつものだ。

今回は、本部医務室の管理人、白衣のちょっと男勝りなエルフ、ミリアンと共同前線を張つた筈なのだが。

「お前がどのくらつの力量を持つてゐるのか見定めてやるうではないか」

との事で。

今は近くの喫茶店でのんびりお茶してゐる。

無論、お店の人などとつに逃げてゐるので、勝手に店に入つてコーヒーをかつぱらつてきているだけなのだが。

吹き飛んでくる車や建造物の破片などを持つまへ避けながらつまそつに口・ヒーをすすつてゐる。

その身のこなしから見て、強いとこりのこは本当ひしこ。

しかし、ここまでボロボロにやられてゐる要を見ても助けないのは。要がまだ死ぬことは無いとこりのがわかつてゐるからだらう。

要の姿は、所々衣服が破れてはいるものの、直接的な傷はほとんど負つていない。

玄人が見たならばまだまと言つかもしれないが、一般人から見ればかなり運動神経の良い人に見えるだらう。

突撃してくる蜂の巨大な針をかわし、蜂が吹き飛ばしたコンクリートの破片の雨を潛り抜ける。

きつと普通の人間ならば無理な芸当だらう。

だが、一度能力を開花させれば、基本的な運動能力は飛躍的にアップする。

能力が目覚めたことで、今まで使つていなかつた部分の脳の鍵を開けるとかなんとか。

とにかくそういうこらし。

それでも、逃げ続けるにも限界がある。

勿論、要も攻撃をしてはいるのだが。

いかんせん、落ちてゐる石を投げただけではどうにも…。要の体力も限界が近付いていた。

そのとき。

「さあて、そろそろ要君の体力も限界だしき、私の出番かな？」

ミリアンが椅子から立ち上がつた。

「よこせつと」

ミリアンは巨大な弓を、魔法のよつに手から取り出す。

「やつぱつ」「はかつ」「いいよなあ？青年」

その弓は白く、ぼんやりと光っていた。  
きつと未来の不思議素材。

そんな弓を構えた。

矢もあてがつていらない弓の弦を力いつぱい引いた。  
すると。

本来矢があるはずの場所に光が集まつていった。  
その光は矢の形に。

狙いを定め、弦を放した。

すると光の矢は、目にも止まらぬ速さで飛び、蜂の胴体部分に突き  
刺さった。

「…………」

ガラスの破片でガラスを引っ搔いたような叫びを上げる巨大蜂。

ミリアンはまたも弓を構える。

今度は、たくさん光の矢が弓に集束されていく。

「こなこともできるんだよ？」

弦を放した途端、何十本もの光の矢が敵に襲い掛かる。  
まるで散弾銃のような矢の嵐。

それは次々に蜂の体に突き刺さつていった。

「今日は溜め打ちだぞ？」

弦を引き、離さずにそのままにしておく。すると矢がだんだん巨大になり、ついには大木並みの大きさにまでなった。

「巨大蜂くんよ、遺言はあるか？」

そういうとミリアンは『』を放した。

巨大な光の矢は、遺言を残す時間も与えずに巨大蜂の体を貫いた。

声もなく蜂は地面に墜落し、そのまま息絶え、消滅した。

「… さつきの蜂、遺言ありそうだつたけど？」

「ほら、それは悪い」とした

その場で二人の戦いを見ていた要是、よつやつと決着がついたときを見計らい、ミリアンに声を掛けた。

「しかし、何故に能力を使わなかつたんだ？」

「やり方を忘れたんだよ」

「ふうむ、なかなか厄介だな」

ミコトーンは首をかしげる。

「ちゃんと自分で能力を解放できるよつこ、またきみをぶん殴った少女と訓練をしてもらわなければいけないな…。」

「げつ？ それは絶対に嫌だ」

「ふふん、そういううな。 それでは、私が稽古をつけてあげようではないか？」

「いいのか？」

「構わないさ。 私も君の能力には興味があるしな

「あるほどねえ」

「もし君の能力が接近戦タイプのものだつたら、私と君と少女で組んで、近距離中距離遠距離で、ジョンシットストームアタックとかできるんだ？」

「えらい楽しそうだな…。」

なんて雑談をしながら、一人は本部に帰つていった。

## 守護その5・共同前線（後書き）

乱筆乱文誠に失礼。

更新遅くてかなり申し訳ないです。  
テストがあつたり、指に火傷したりと、いろんなことがあつたんです。

なにを言つても言い訳にしかなりませんが…。  
感想、評価、よろしくお願ひします。

「お、おーーーちょっと待てーーー待てーーー」

観鏡要は追いかけられていた。

医務室の女医、ミコアン。

「お、おー青年ー。そんなんで刺客に勝てるのかあーーー？」

「…くわーーー！」

さつとあの少女よりも酷い。

と、嘲は思った。

しかし、あの少女も大層などう振りだったのを、今の現実にかき消されているだけである。

実際同じくらいのどう振り。

しかし、人間は今しか見つめられない生き物なのである。やられる側は得てしてやつこつものである。

…前にもいふなこと言つてなかつたつけ？

ਗੁਰੂ ਨਾਨਕ ਦੇਵ ਮਿਸ਼ਨ ਸਾਹਮਣੇ ਵਿਖੇ ਪ੍ਰਾਤਿਸ਼ਤ ਸੁਵਾਹਿਤੀ ਦੀ ਵਰਤੋਂ ਕਰਨਾ ਚਾਹੀਦਾ ਹੈ।

要を追いかけながら矢を乱射してくるミリアン。

当たつたらいぢつあるつもつなのか……。

案の定矢の一一本が要の背中に当たる。

「ああ、ふん！？」

奇妙な悲鳴を上げて吹っ飛び、床に抱きつく格好になる要。しかし大した怪我は無い。

一応出力の手加減はしているらしい。  
が、要は白目をむいて気絶している。

この人は一体なにをやつて いるんだか。

「あ～あ、こんなことでへこたれてしまつなんてな…」

期待外れだ、と首を横に振る。

いや、お前が悪いんだろ、なんて誰も言つてないけれど。

「とにかく、一度医務室に連れて行かなければ……」

「…いや、いい

「ん？」

ゆうべひとつ皿を開けて立ち上がる頃。

「おお、まだ戦えるのか？」

「おひーーこれしきでへばる俺じやないぜーー！」

さつきまで白皿をむいて氣絶していた人間とは思えない復活振りだった。

「よし、それではもう一度たつぱりじーじやあつ…、さつきの三倍くらいなーー！」

「来ーーーせーたるせーーー！」

威勢がいいのは初めだけだった。

ボ「ボ」られて医務室に寝かされている要と、それを看病しているミコアン。

それが15分後の情景だった。

なんというか、予想通りというか。

きっと読者の大半がこの展開を予想していたと思つ。

この小説は期待を裏切らない小説にしたいのです。（戯言談）

と、いわじりで、この展開。

要とミコアンのこけやうぶを書きましょ。

「へ……ん、あれ、こじせ……」

「うん？ 気がついたか？」

ベッドに寝ている要。

に、添い寝してくるミコアン。

「お、おこなこをしてんだキサマー。」

「看病だらうが、看病、かーんーじょーうー。青年が田を覚ますまで人肌の温度で暖めてやっていたのではないか？ 感謝しないよ。」

「…まさか、また写真を撮つていいのか？」

「当然だらうが」

即答され、絶望的な顔をする岬。

「…次は向をすればばら撒かないで済ませてくれるんだ?」

「別にばら撒くなんていってないではないか?」

「じゃあ…、ばら撒かないのか…?」

「やうとも言つてなー」

「なんだよチッキシ四ーーー!」

「今日は、青年の能力が見れれば良いことよ!」

「それは無理だな」

即答する岬。

落胆する岬アン。

「やうか、なれば仕方が無い。…」の『真はわたしのブログのトップページに貼り付けておこう』としつつ

「全国ネットで流す気かー?」

「仕方なかひひへ。きみが無理ならひつするだけだ」

「んー…、ああもつーわーつたよー。せつやあいこんだひつ?。せつやあー。」

いいのは威勢だけだつたPart2。

案の定、床にへばりつくな。

「…やつぱあの女の子よつどいだよなあ…」

同じくらごである。

今の現実に搔き消され以下略。  
人間は今しか見つめられな以下略。  
やられる側は得てして以下略。

同じことばかり書いても微妙ですよね？

とまあ、こんな状況である。

「ふむ、何故能力が使えないのだらうな？」

「…し、知るかよ…」

「つーむ、 しょうがないか。 あの写真はネットで公開しちよつ

「ち、 任せゆかよ…！」

「な、 なにい！？」

赤黒く光りだす要の体。

その瞬間、 要の体は以前と同様、 恐ろしげな物へと変わっていた。

そして、 赤黒く光を放つ身の丈以上の大剣。

なぜこんな緊張感のない場面で変身を？

誰もがそんな疑問を、 いま、 持っているはずである。

それは、 あとで明かされるので、 しばし待つていただきたい。

今は、 なにも知らぬ振りをして、 ギヤグシーンなのに無駄にシリアスという、 近年稀に見る不思議な状況を楽しんでいただきたい。 いまの作者に言えるのは、 それだけである。

「テメヒ…、 それ以上その写真を公開するのを止めないと言い張るのなら…、 僕がここでキサマの命を刈つてやる…！」

「ふん…、 なるほど、 きみの能力はそんなに強力なものだつたんだ

な…。自分で制御できなこのもつなずけ…」

「ああ？ つべ！」べ囁わざに…、その「写真をよ！」しゃがれえ…」

ミコトノに飛び掛る要。

それを迎え撃つミコアン。

交差。

数瞬の後、倒れたのは要の方だった…。

「ふん、能力が開花したての素人」ときに、この「写真を盗らせやせんよ」

うつ伏せに倒れた要を見下すミリアン。

「しかし…、流石にわたしも、ノーダメージではすまなかつた、よう…だな」

そうこうで、床に倒れこむミコアン。

「写真は、まだミコアンのものであった…。

「写真」ときなのに「ばかばかしいまでの真剣さで」の章は幕を閉じるのである。



乱筆乱文誠に失礼。

ちょっと、自分で書いててバカらしくなりました。  
でも、このアホっぽさがきっとこの小説にはぴったりなんだと思いま  
す…、たぶん。

これ以上のアホっぽさを追求して、次の章は更に変な感じになると  
思つので、覚悟しておくとよろしいと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0589e/>

---

神様おまもり隊！

2010年11月13日02時58分発行